

GR学部教員が選ぶ GR学部 2・3 年生向け推薦図書

✦ 学部全体向け

タイトル	過去は死なないーメディア・記憶・歴史(岩波文庫)	推薦者	阿部 範之(アジア・太平洋コース)
		著者	テッサ・モーリス＝スズキ(田代 泰子 訳)
出版社	岩波書店	出版年	2014 年 ※初刊 2004 年
コメント	日本の歴史教科書問題を端緒として、歴史小説、写真、映画、漫画、インターネットといった様々なメディアにおける歴史の扱い方、叙述のあり方を分析しており、その研究手法も大いに参考になりますが、何より、現代において「歴史」をどう認識し、どう扱っていくべきかを考える上で多くの示唆に富む本です。		

タイトル	コットンをめぐる世界の旅——綿と人類の暖かな関係、冷酷なグローバル経済	推薦者	Anne GONON(ヨーロッパコース)
		著者	エリック・オルセナ(吉田 恒雄 訳)
出版社	作品社	出版年	2012 年
コメント	著者はコットンをめぐる世界の旅をしている。訪世界各地を訪ねて数千年にわたるコットンと人間の温かき豊かな関係であったことや、現在、それを無残に打ち壊しているグローバル経済の冷酷な現実を語る。		

タイトル	フラット化する世界〔普及版〕 上・中・下	推薦者	肥後本 芳男(アメリカコース)
		著者	トーマス・フリードマン(伏見 威蕃 訳)
出版社	日本経済新聞出版社	出版年	2010 年
コメント	世界経済がグローバル化するというのは、具体的にどのようなことを意味するのか、冷戦終結後、とりわけ IT 産業の進展にともない急速に地球規模に進む人やモノ、情報の拡散に焦点を当て、本書は 21 世紀初頭の経済や文化的潮流を浮き彫りにする。「グローバル社会」の功罪を考えるうえで、有益な書物の一つである。		

タイトル	違和感から始まる社会学——日常性のフィールドワークへの招待(光文社新書)	推薦者	石井 香江(ヨーロッパコース)
		著者	好井 裕明
出版社	光文社	出版年	2014 年
コメント	何をテーマにして卒業論文を書こうか迷っている人には是非読んでもらいたい一冊です。卒業論文を書くことは確かに骨が折れる作業ですが、「こんなことを知りたい・明らかにしたい」という強い問題意識があれば、この作業は苦にはなりません。しかし問題意識は、簡単に育まれるわけでもありません。本書は、普段見過ごしてしまいがちな、当たり前の「日常性」の中にこそ、問題を探り当てる手がかりが隠れていることを教えてください。たとえばスマホを見ながら歩いている人にぶつかられて感じた違和感を一つの手がかりとして、今日の社会や人間関係の特徴について考えをめぐらすこともできるわけです。		

タイトル	国際貢献のウソ(ちくまプリマー新書)	推薦者	石井 香江(ヨーロッパコース)
		著者	伊勢崎 賢治
出版社	筑摩書房	出版年	2010 年
コメント	挑戦的なタイトルに一瞬ひるむ人も多いと思いますが、NGO、国際協力ボランティア、国連、ODA、自衛隊という日本の国際貢献にひそむ矛盾を直視する意欲的な著作です。本書で筆者は「助けるべき人間は日本にもいるのに、なぜわざわざアフリカまで行って、援助しなければならないのか」という問いに向き合います。その回答は決して「正論」ではありませんが、スラム住民の居住獲得運動に関わり、国際 NGO に身を置いてアフリカ各地で活動した経験にもとづく筆者の主張は、とても説得的なものです。		

タイトル	オルター・グローバリゼーション宣言——もうひとつの世界は可能だ！もし…	推薦者	菊池 恵介(ヨーロッパコース)
		著者	スーザン・ジョージ(杉村 昌昭、真田 満 訳)
出版社	作品社	出版年	2004 年
コメント	南北格差の問題に長年取り組んできたスーザン・ジョージによるグローバリゼーション論。IMFや世界銀行が主導し、多国籍企業や金融界本位のグローバリゼーションに対し、「もう一つの世界」の可能性を探る。原題(Another world is possible, if…)にあるように、「もし」現状が変えられるとすれば、具体的に何をすべきかをわかりやすく解説する。ウォール街からアテネやマドリッドへと広がるオキュパイ運動など、グローバル市民社会の動向を理解するには欠かせない一冊。スーザン・ジョージのロングセラー『なぜ世界の半分が飢えるのか』(朝日選書)も併せて読みたい。		

タイトル	ショック・ドクトリン——惨事便乗型資本主義の正体を暴く 上・下	推薦者	菊池 恵介(ヨーロッパコース)
		著者	ナオミ・クライン(幾島 幸子、村上 由見子 訳)
出版社	岩波書店	出版年	2011 年
コメント	カナダのジャーナリスト、ナオミ・クラインの世界的なベストセラー。クラインによれば、近年の世界的な階層格差の拡大は、単なる景気変動の産物などではなく、長年継続されてきた或る政策によって「作りだされた」ものである。その政策こそ、シカゴ大学経済学部のミルトン・フリードマンらが提唱し、やがて「新自由主義」と呼ばれるようになる一連の改革にほかならない。民営化、規制緩和、減税、財政支出の削減が、その柱をなす。本書では、過去半世紀の歴史を振り返ることにより、いかにして新自由主義が世界に拡大してきたかを描き出す。		

タイトル	グローバル・ソシオロジー I・II	推薦者	松久 玲子(アメリカコース)
		著者	ロビン・コーエン、ポール・ケネディ(山之内 靖 監訳、伊藤 茂 訳)
出版社	平凡社	出版年	2003 年
コメント	グローバリゼーションがもたらす社会変動に関して、それを理解するための社会学の理論とグローバリゼーションに関連するさまざまな問題が具体的な事例を交えて検討されている。卒業論文を書く準備段階として、私達が置かれているグローバルな社会事象を把握し、今後の研究の方向性を模索する上で参考になると思われるので、是非読んでおいて欲しい。		

タイトル	砂糖の世界史(岩波ジュニア新書)	推薦者	水谷 智(ヨーロッパコース)
		著者	川北 稔
出版社	岩波書店	出版年	1996 年
コメント	筆者はイマニュエル・ウォーラーステインの「近代世界システム論」の紹介者として知られる元大阪大学教授。1996年に刊行された本書は、「岩波ジュニア新書」シリーズのひとつで、高校生向けに書かれた啓蒙書ですが、大学生や研究者にも長く読み継がれてきた名著です。砂糖の歴史をたどることで、世界の異なる地域の人々の生活が連結しながら発展した世界史のダイナミズムについて学ぶことができます。		

タイトル	世界史の構造(岩波現代文庫)	推薦者	水谷 智(ヨーロッパコース)
		著者	柄谷 行人
出版社	岩波書店	出版年	2015 年
コメント	いわゆる「グローバルヒストリー」とは何かを理解することはグローバル地域文化学部の学生にとって極めて重要ですが、本書はそのための多くの示唆を与えてくれる学術書です。「生産様式」の代わりに「交換様式」を歴史分析の基盤に据えることで、新たな世界史へのアプローチを提示しています。内容は決して簡単ではありませんが、文章自体は極めて明快で読みやすいです。		

タイトル	パスポートの発明——監視・シティズンシップ・国家(サピエンティア)	推薦者	落合 明子(アメリカコース)
		著者	ジョン・C・トーピー(藤川 隆男 監訳)
出版社	法政大学出版局	出版年	2008 年
コメント	現代人が国を越えて移動する際の必需品であるパスポートが作られ、国家が個人の移動を掌握していった様子を、ヨーロッパ各国やアメリカ合衆国の事例を具体的にあげながら解説した本です。近代国家の形成過程やナショナリズムの形成過程に関心のある方にお勧めです。		

タイトル	これからレポート・卒論を書く若者のために	推薦者	落合 明子(アメリカコース)
		著者	酒井 聡樹
出版社	共立出版	出版年	2007 年
コメント	いわゆる論文の書き方のハウツー本ですが、論文の執筆方法や心得が事例と共に段階的に分かりやすく解説されています。学生に論文指導をする際に、私自身もよく参考にする本です。レポート課題でどうしてもよい成績が取れないと悩んでいる人、卒業論文を書くことに不安を感じている人は、一読の価値があります。姉妹本に大学院生向けの『これから論文を書く若者のために 究極の大改訂版』もあります。本書に物足りない人は、こちらをお勧めします。		

タイトル	超国家主義の論理と心理 他八篇(岩波文庫)	推薦者	小川原 宏幸(アジア・太平洋コース)
		著者	丸山 眞男 著、古矢 旬 編
出版社	岩波文庫	出版年	2015 年
コメント	日本政治学の泰斗・丸山眞男を一躍有名にした表題作をはじめ、全 9 篇の論文を文庫として手軽に読めるようになった。日本の政治、思想を思惟構造にもとづいて読み解くその分析手法は、表面的な理解にとどまり、現実政治に幻惑されがちな私たちにとって、同著者の『日本の思想』(岩波新書)とあわせて、いまなお読みつがれるべき視座を数多く含んでいる。		

タイトル	ツァラトゥストラはこう言った 上・下(岩波文庫)	推薦者	小川原 宏幸(アジア・太平洋コース)
		著者	ニーチェ(氷上 英廣 訳)
出版社	岩波書店 (ほか各社版あり)	出版年	1967 年
コメント	「神は死んだ」と宣言された神なき世に、ニヒリズムに陥らずにどのように生きていくことができるのか。「超人」という「力への意志」をもったツァラトゥストラの口を借り、強く、深く考え抜くことの意味をニーチェは説く。グローバリゼーションの進展のもとで、これまでの価値観が融解し多元化する現代において、私たちがどう生きていくべきかという思索に誘う書物である。		

タイトル	ヴェニスからアウシュヴィッツへ——ユダヤ人殉難の地で考える(学術文庫)	推薦者	小野 文生(ヨーロッパコース)
		著者	徳永 恂
出版社	講談社	出版年	2004 年
コメント	思想研究を志す人はもちろん、思想に関心のない人も、ぜひこれは読んでみてほしい。思想研究のイメージが変わるはずである。文献研究でもなく、紀行文でもない。学術論文でもなく、しかしエッセーでもない。いわば、それらをすべてひっくるめた文体とアプローチというべきか。主たるテーマはユダヤ人迫害の歴史だが、所属コースや研究関心の別を超えて、現代を生きるわれわれの世界に突き刺さった棘のような数々の問いに、それぞれの立場から敏感に感応し、思索してほしい。		

タイトル	暗い時代の人々(ちくま学芸文庫)	推薦者	小野 文生(ヨーロッパコース)
		著者	ハンナ・アレント(阿部 斉 訳)
出版社	筑摩書房	出版年	2005 年
コメント	アレントは、ドイツ生まれのユダヤ人、哲学者ハイデガーの愛弟子、ナチスの迫害によりアメリカへ亡命した 20 世紀を代表する政治思想家。『全体主義の起源』や『人間の条件』など数々の名著で知られる彼女は、しかしそうした体系的書物より、むしろこの書のようなある種の人物批評・思想批評にこそ真骨頂があるとみることもできる。ローザ・ルクセンブルク、ヘルマン・ブロッホ、ヴァルター・ベンヤミン、ベルトルト・ブレヒトなど、荒廃してゆく「暗い時代」に生きた人びとが求めた何かしらの光明を、ふたたび見だし、救い、その明かりを継いで灯しつづけるアレントの珠玉のエッセー。戦争と暴力の 20 世紀を生き抜いた女性思想家のことばに、多くを学んでほしい。		

タイトル	啓蒙の弁証法——哲学的断層(岩波文庫)	推薦者	小野 文生(ヨーロッパコース)
		著者	マックス・ホルクハイマー、テオドール・アドルノ(徳永 恂 訳)
出版社	岩波書店	出版年	2007 年
コメント	ホルクハイマーとアドルノという二人の社会哲学者のコラボによる「フランクフルト学派」の記念碑的作品。ナチス期に亡命し、戦時中アメリカで書き継がれ、戦後ドイツ思想のバイブルともなった。呪術的世界を脱し、野蛮を排そうとする啓蒙。理性に依拠し、進歩と文明を信ずる啓蒙。にもかかわらず、まさにその理性そのものが「暴力」と「野蛮」を生み出すという皮肉な弁証法的構図をみごとに解き明かしている。「何故に人類は、真に人間的な状態に踏み入っていく代りに、一種の新しい野蛮状態へ落ち込んでいくのか」という本書の解きたい問いかけは、現代のわれわれにも向けられている。難しくおもったら、細見和之『アドルノ』(講談社)などと一緒に読むとよいだろう。		

タイトル	国際関係論講義	推薦者	Aysun UYAR(アジア・太平洋コース)
		著者	山影 進
出版社	東京大学出版会	出版年	2012 年
コメント	国際関係論について学問的に紹介する本である。国際関係論における歴史的な背景、現在の国際社会におけるアクター、システム、構造、理論とそれぞれの問題点について説明し、国際関係論をより具体的に理解できる 20 世紀における国際社会のさまざまな事例も含まれている。また、21 世紀に入ってから国際社会に紹介された新しい問題点やグローバル協力を目指す解決方法について紹介する。		

タイトル	人種主義の歴史	推薦者	尹 慧瑛(ヨーロッパコース)
		著者	ジョージ・M・フレドリクソン(李 孝徳 訳)
出版社	みすず書房	出版年	2009 年
コメント	比較史というアプローチを切り拓いた著者による人種主義の歴史的考察の書。中世キリスト教社会における「反ユダヤ主義」、大航海時代以降の植民地政策に由来する「白人至上主義」が、ナチスによるホロコースト、アメリカの奴隷制、南アフリカのアパルトヘイトという「明示的人種主義」へと展開する過程を描き出す。巻末の訳者解説は、本書をさらに深くかつ批判的に理解するうえで有用である。		

タイトル	レイシズムの変貌——グローバル化がまねいた社会の人種化、文化の断片化	推薦者	尹 慧瑛(ヨーロッパコース)
		著者	ミシェル・ヴィヴィオルカ(森 千香子 訳)
出版社	明石書店	出版年	2007 年
コメント	レイシズムが現代社会において形を変えながら存続している様をグローバリゼーションとの関わりにおいて論じた書。「科学的レイシズム」は消滅したか見えて、代わりに近年ヨーロッパにおいて高まりつつある、「差異」や文化の固有性を強調する言説と結びついた「新しいレイシズム」についての議論を整理している。フレデリクソンの『人種主義の歴史』とあわせて読んでほしい。		

タイトル	グローバリゼーションと暴力—マイノリティーの恐怖	推薦者	尹 慧瑛(ヨーロッパコース)
		著者	アルジュン・アパドウライ(藤倉 達郎 訳)
出版社	世界思想社	出版年	2010 年
コメント	グローバリゼーションがどのようにして排除や民族殺戮、理念の殺戮などのマイノリティにたいする暴力を生み出すのかを明らかにすることで、グローバリゼーションを平等や創造、包摂を可能にする力に変えていこうとする「希望の政治」を模索した書。9.11 後のマジョリティとマイノリティの関係を考える手がかりとなる。著者は人類学、南アジア地域研究の権威であり、インドの事例も多く紹介されている。		

タイトル	グローバリゼーションと移民	推薦者	尹 慧瑛(ヨーロッパコース)
		著者	伊豫谷 登士翁
出版社	有信堂高文社	出版年	2001 年
コメント	移民を移動の日常的な形式かつ現代の労働力の再生産における一般的な様式としてとらえたうえで、グローバル化時代の社会形成を考察した書。グローバリゼーションの時代における現代移民研究の課題を明らかにするとともに、アメリカ資本主義のなかの移民、日本経済のグローバル化と外国人労働者問題についても論じている。		

GR学部教員が選ぶ GR学部 2・3 年生向け推薦図書

◆ コース向け

【ヨーロッパコース／アメリカコース】

ヨーロッパコース／アメリカコース		推薦者	肥後本 芳男(アメリカコース)
タイトル	トクヴィル平等と不平等の理論家(談社選書メチエ)	著者	宇野 重規
出版社	講談社	出版年	2007 年
コメント	若きトクヴィルは、18 世紀末から 19 世紀にかけて出現した「デモクラシー」社会の原型を新興国アメリカに見出す。それから 200 年近くたった今、政治や生活環境は大きく変わったが、21 世紀の「グローバル社会」に生きるわれわれにとっても自由や平等・不平等に関する諸問題を「デモクラシー」の枠組みの中でいかにうまく折り合いをつけてゆくのかは喫緊の課題である。本書はアメリカのみならず多極化する現代世界を考えるうえで有益なヒントを与えてくれる。		

【ヨーロッパコース】

ヨーロッパコース		推薦者	Anne GONON(ヨーロッパコース)
タイトル	他者の苦しみへの責任——ソーシャル・サファリングを知る	著者	A・クラインマン、J・クラインマン、V・ダス、P・ファーナー、E・V・ダニエル、T・アサド(坂川 雅子 訳、池澤 夏樹 解説)
出版社	みすず書房	出版年	2011 年
コメント	貧困・難民問題など、社会的につくられる苦しみ、他者の苦しみを、私たちはどのように捉えて伝え、受け止めて解決していくべきか、などの立場から、インド、ハイチでの声なき者や、「遠くの苦しみへの接近とメディア」などのテーマを取り上げる専門用語を使わない論本集である。		

ヨーロッパコース		推薦者	石井 香江(ヨーロッパコース)
タイトル	他者の権利(新装版)——外国人・居留民・市民	著者	セイラ・ベンハビブ(向山 恭一 訳)
出版社	法政大学出版局	出版年	2014 年
コメント	トルコのイスタンブール出身で、アメリカで教育を受けた後、政治学・政治哲学者としてジェンダーや多文化主義の問題について研究してきたセイラ・ベンハビブの著作である。本書では、外国人やよそ者、移民、ニューカマー、難民や庇護申請者といういわば「他者」を包摂するための原理と実践としての「政治的シテズンシップ」に光が当てられている。カント、アレント、ロールズらの思想が検討される前半部はやや難解であるが、後半部、特に 4 章と 5 章は、EU や「スカーフ問題」の例を交えて具体的に考察されているので、分かりやすい。政治的な境界線とシテズンシップとがますます衝突するようになったグローバル化の時代を、政治哲学的にかつ実践的に理解したい方のためにはお勧めの一冊。		

ヨーロッパコース		推薦者	石井 香江(ヨーロッパコース)
タイトル	フランスとドイツの国籍とネーション——国籍形成の比較歴史社会学(明石ライブラリー)	著者	ロジャース・ブルーベイカー(佐藤 成基、佐々木てる 監訳)
出版社	明石書店	出版年	2005 年
コメント	ロジャース・ブルーベイカーはアメリカの社会学者で、国籍・ネーション・ナショナリズム・エスニシティを比較歴史社会学的な方法を用いて研究している。1992 年に刊行された本書は、出生地主義の強いフランスと 2000 年に国籍法が改正されるまでは血統主義の影響が強かったドイツにおける、二つの対照的なシテズンシップの形成史を追っている。「国民」とは一体誰のことなのか、その線引きのありようが徐々に変化してきた二国の事例を振り返ることで、日本における「国民」理解を相対化する良い機会となるだろう。		

ヨーロッパコース		推薦者	石井 香江(ヨーロッパコース)
タイトル	危険社会——新しい近代への道(叢書・ウニベルシタス)	著者	ウルリヒ・ベック(東 廉、伊藤 美登里 訳)
出版社	法政大学出版局	出版年	1998 年
コメント	2015 年 1 月に亡くなったドイツの社会学者ウルリヒ・ベックの代表作。チェルノブイリ原発事故と同年に刊行され、社会科学の本としては例外的に世界的ベストセラーとなった。原題は Risikogesellschaft、日本語に訳せば現代世界を特徴づける「リスク社会」であり、現代社会を分析する上で今では基本的な枠組みが提示されている。「新しい近代」に足を踏み入れた私たちは、伝統から解放される自由の代償として「リスク」を受け入れなければならない。伝統からの自由とは、別の見方をすれば、従来の思考や行動のパターンでは通用しないということでもあり、それはたとえば環境問題や失業といった新しいリスクを生み出す。本書はまず科学と技術、次に家族と職業、最後に政治という領域での新しいリスクについて考察し、これらのリスクを克服するための方途を展望している。現代社会をマクロな視点で概観するために一読をお勧めしたい。ちなみにベックは、ドイツ連邦政府の諮問機関「安全なエネルギー供給のための倫理委員会」メンバーも務めている。		

ヨーロッパコース		推薦者	松本 賢一(ヨーロッパコース)
タイトル	戦争と平和 1・2・3・4(新潮文庫)	著者	レフ・トルストイ(工藤 精一郎 訳)
出版社	新潮社(ほか各社版あり)	出版年	2005 年
コメント	言わずと知れた近代ロシア文学の名作です。「え、小説？」と思わずに、学生時代にしかできないゆっくりとした読書をしてください。登場人物の運命に共感したり、反発したり、といった読み方もいいのですが、フランス革命とナポレオン戦争で、それまでの社会やモラルが変容を強いられ、様々な階層の人々がある中でいかに生きようとしたかを見ることは、変動著しい世界へこれから旅立とうという皆さんには、きっと良い経験になるでしょう。		

ヨーロッパコース		推薦者	小野 文生(ヨーロッパコース)
タイトル	昨日の世界 1・2(みすずライブラリー)	著者	シュテファン・ツヴァイク(原田 義人 訳)
出版社	みすず書房	出版年	1999 年
コメント	世紀末ウィーンの作家シュテファン・ツヴァイクは、ハプスブルク帝国、ヴァイマル共和国期、ナチス期を生きた同化ユダヤ人だった。世紀末ウィーンにおける破局への予感を秘めた文化の絶頂、そしてそこから滅びゆく世界が、失われた『昨日の世界』への哀惜のまなざしによって、彼の手で生き生きとよみがえる。むろん、ベストセラー作家でありながら亡命へと追い込まれたユダヤ人としての独自の経験もそこに関与しているが、同時に、日本のアジア侵略の報に接して亡命先の南米で命を絶ったこの作家の世界性を見落としてはならない。19 世紀末から 20 世紀初頭のヨーロッパを知るための古典。		

ヨーロッパコース		推薦者	小野 文生(ヨーロッパコース)
タイトル	全体性と無限——外部性についての試論 上・下(岩波文庫)	著者	エマニュエル・レヴィナス(熊野 純彦 訳)
出版社	岩波書店	出版年	2005 年
コメント	レヴィナスは、リトアニア出身、フランスで活躍したユダヤ人哲学者。彼自身、家族親類のほとんどを強制収容所でなくした経験をもつ。レヴィナスは、すべてを「私」の世界へ同化する「全体性」の営みのうちに西欧哲学の特質を見だし、批判する。他者は「私」の世界の「外部」であり、「無限」である、と。それを同化する営みは、暴力にほかならないのではないかと。西欧思想に正面から大いなる否を突きつけ、それとは別様の倫理をうちたてようとしたレヴィナスの思想は、全世界でいま、多様な領域において大きなインパクトをもって受容されつつある。植民地、移民、先住民、差別などに関心があるひとは特におすすめ。合田正人『レヴィナス』(ちくま学芸文庫)と併読することを推奨する。		

ヨーロッパコース		推薦者	尹 慧瑛(ヨーロッパコース)
タイトル	ヨーロッパ市民の誕生——開かれたシティズンシップへ(岩波新書)	著者	宮島 喬
出版社	岩波書店	出版年	2004 年
コメント	ヨーロッパ移民研究の第一人者による、ヨーロッパにおけるシティズンシップ論。地域統合や分権化が深まる一方、移民・難民の増加と定住がすすむヨーロッパにおいて、国籍や社会的権利の考え方がどのように変わりつつあるのかを、移民の受け入れをめぐる議論、EU シティズンシップや、言語、家族、ジェンダーの観点から読み解く(ただし本書が対象とするのは、中・東欧の拡大以前の旧 EU 諸国である)。		

【アジア・太平洋コース】

アジア・太平洋コース		推薦者	小川原 宏幸(アジア・太平洋コース)
タイトル	日本とアジア(ちくま学芸文庫)	著者	竹内 好
出版社	筑摩書房	出版年	1993 年
コメント	巻頭に収められた「中国の近代と日本の近代」や、史料集の解説論文として書かれた「日本のアジア主義」など、魯迅への傾倒を通じ、中国だけでなく日本の近代を思索した竹内好の論考が数多く収められている。思想家・竹内好の入門書であると同時に、アジアを考える上での必読書。アジアを見る眼差しを鍛え上げるためにも、ぜひ学生のうちに一読してほしい。		

アジア・太平洋コース		推薦者	小川原 宏幸(アジア・太平洋コース)
タイトル	アリランの歌——ある朝鮮人革命家の生涯(岩波文庫)	著者	ニム・ウェールズ、キム・サン(松平 いを子 訳)
出版社	岩波書店	出版年	1987 年
コメント	革命が進む 1930 年代の中国・延安で、ヘレン・フォスター・スノー(筆名ニム・ウェールズ)が偶然出会ったキム・サンへのインタビューをもとにつづった朝鮮人革命家の半生記。三・一独立運動後、中国に亡命して活動を続けるなかで、意図せずして国際的活動家となったキムに、何重もの「国際性」を刻み込んでいく当時の状況をつぶさに読み取ることができる。アジアの革命家のライフストーリーとしても、また、個人的記録から帝国主義的国際関係を読み解いていくための題材としても格好の読み物である。		

アジア・太平洋コース		推薦者	竹内 理樺(アジア・太平洋コース)
タイトル	現代東アジア——朝鮮半島・中国・台湾・モンゴル	著者	国分 良成 編著
出版社	慶應義塾大学出版会	出版年	2009 年
コメント	現在の東アジア地域の政治・社会を考える上で必要な基礎知識として、朝鮮半島および中国(香港)、台湾、モンゴルの近現代史を学ぶことのできる「東アジア」地域に関する入門書。		

アジア・太平洋コース		推薦者	竹内 理樺(アジア・太平洋コース)
タイトル	アジアのなかのジェンダー——多様な現実をとらえ考える	著者	川島 典子、西尾 亜希子 編著
出版社	ミネルヴァ書房	出版年	2012 年
コメント	ジェンダーに関する基本的な知識を押さえた上で、日本のジェンダーに関する課題—社会保障や介護、子育て、雇用、教育などの実態を学ぶことができる。また、中国、韓国、インド、ベトナムにおけるジェンダーの歴史と現状についても、非常にわかりやすくまとめられている。		

アジア・太平洋コース		推薦者	Aysun UYAR(アジア・太平洋コース)
タイトル	International Relations of Asia	著者	David Shambaugh, Michael Yahuda
出版社	Rowman and Littlefield Publishers	出版年	2014 年
コメント	アジアの 20 世紀および 21 世紀における国際関係論について理解できる本である。アジア地域のサブ地域における多国間の問題点や協力について説明されている。また、アジア地域の政治経済体制を代表している日本・中国・韓国の三ヶ国関係について特に分析している。		

【アメリカコース】

アメリカコース		推薦者	落合 明子(アメリカコース)
タイトル	アメリカを知る事典 新版	著者	荒 このみ、岡田 泰男、亀井 俊介、久保文明、須藤 功、阿部 斉、金関 寿夫、斎藤 眞
出版社	平凡社	出版年	2012 年
コメント	アメリカ合衆国の歴史・政治・経済・文化などを広く網羅しながらも、項目ごとにコンパクトに解説した用語辞典です。日本語からも英語からも引けて、とても便利です。アメリカ合衆国に興味がある人は、手元に置き、こまめに調べるようにしましょう。		

アメリカコース		推薦者	落合 明子(アメリカコース)
タイトル	戦死とアメリカ——南北戦争 62 万人の死の意味	著者	ドルー・ギルピン・ファウスト (黒沢 眞里子 訳)
出版社	法政大学出版	出版年	2010 年
コメント	アメリカ合衆国史上最多の死者を出した南北戦争が、アメリカ社会にいかに大きな影響を与えたのかを、多数の戦死者を出した戦場のあり様や、息子や夫の遺骨を探し求めたり、死の意味を模索続ける遺族の姿、国家による戦死者の顕彰のあり方などの事例を通じて綴った本です。本書からは、南北戦争がアメリカ合衆国の歴史文化において現在でも重要な地位を占めている理由が分かるでしょう。著者はハーバード大学初の女性学長となった南北戦争史家で、本書は第一級の学術研究書ですが、決して難解ではなく、物語としても読める一冊です。		

